



蜻蛉日記解釈大成

第5卷

上村悦子 著

明治書院

著者略歴

上村悦子 (うえむら えつこ)

京都市生まれ。

昭和八年 日本女子大学大学本科学部国文学科卒業

現在 日本女子大学名誉教授

文学博士

著書 『更級日記 (後注)』 (昭和27年)

『万葉集 現代訳と鑑賞』 (昭和28年)

『万葉名歌』 (昭和31年)

『蜻蛉日記 校本・書入
諸本の研究』 (昭和38年)

『蜻蛉日記の研究』 (昭和47年)

『王朝女流作家の研究』 (昭和50年)

『蜻蛉日記 全訳注 (上・中・下)』 (昭和53年)

『万葉集入門』 (昭和56年)

『赤染衛門』 (昭和59年)

現住所 〒175 東京都板橋区高島平3-10-8-201

蜻蛉日記解釈大成 第5巻

定価 16,000円
(本体15,534円)

平成元年12月20日 印刷

© 1989 Etsuko Uemura

平成元年12月25日 発行

Printed in Japan

著者 上村悦子

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹彰

印刷者 大日本法令印刷株式会社

代表者 田中忠



発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16 郵便番号101

電話 (03) 292-3741 (代) 振替口座東京3-4991

ISBN4-625-51121-6

星共社製本

凡 例

一 本文について

一、「本文」は宮内庁書陵部蔵桂宮本「蜻蛉日記」上・中・下三巻を底本とした。ただし、適宜漢字をあてたが、その場合必ず漢字に振り仮名を施した。振り仮名のない漢字は底本が漢字であることを示す。

二、底本の誤脱と認められる箇所は、他本・諸家の考勘を参考にし、あるいはさらに筆者の私見を加え、最も妥当と思われる本文に改訂した。その場合、右傍に・を付し、「本文整理」の項の——の下に底本の形を示した。

三、歴史的仮名遣いに相違する箇所、単語を異にする繰り返し符号（踊り字、宛字として用いられた漢字は改めたが、その右傍に底本の字を書き記した。

四、底本の送り仮名・助詞などで不足の文字は本文に補い、右傍に・を付して底本に欠けていることを示し、本文整理にも入れた。

五、適宜、段落を分けて改行し、その上にまとまった大きい段落を設けて、それには小見出しと、全巻通じての通し番号を付した。また、句読点・濁点を付し、会話や消息の部分、引

歌などには「」を施した。

六、底本の傍注・傍記は省略したが、「語釈」のところで触れておいた。

二 「語釈」について

一、「語釈」は原則として、次に掲げる諸本の「語釈」「頭注」「脚注」に書かれた解釈をとりあげて、ほぼ出版年月日の順にあげていったが、時には通釈や現代語訳にあるものを使つた場合もある。補注や追記もなるべく入れた。ただし、既にあげた解釈とはほぼ同じであったり、修辭技巧や入勅撰集の指摘、及び歌・詞書、さらに引歌があげられている場合、記事が幾度も重複するので、「同上」と記したり、省略した場合もある。また簡潔にしたり、「前掲の如く」としたり、あるいはまとめて簡素化をはかった。参考の歌や他作品の例なども、初句と歌集、番号のみをしるし省略した場合もある。特に【集成】の場合は再校の段階で入れたので、第一巻目のみは余白のある所に主として入れることになり、長い文は省略する結果になりおわび申し上げる。

二、仮名遣いも諸本の通りに書き写したので、【解環】はじめ

【補遺】【全訳王朝】【物語日本文学】【平安朝女流日記の鑑賞】

【講義】【^{現代}平安朝女流日記】【^訂蜻蛉日記】なども現代仮名

遣いでない場合があるが、漢字は原則として常用漢字の字体

に改めた。【注解】【抄】は本文以外は現代仮名遣いであるが

促音「っ」は普通の活字の大きさになっているので両本とも

小字に改めた。

三、句読点はほぼ原本どおりに付けたが、あまり多い場合は

少々省略した場合もある。【補遺】【紀行解】など句末に句点

がない場合もあるが、語釈の末尾には句点も入れた。

四、同じ見解の場合、重複するので後に出た本の方は先に出た

本のところに記すが、先の本の方の言葉や仮名遣い、文字を

用いた。例えば【講義】【探究】の場合、講義の言葉を出し

た。従って歴史的仮名遣いである。

五、語釈の中に出て来る書名の「『』」は、改めたりある

いは省略した場合もある。またルビを省略した場合もある。

六、【物語日本文学】の訳が【全訳王朝】の訳とは同じ場合

は前者を省略した場合がある。

七、【講義】と【全講】や【^訂蜻蛉日記】の説明がほぼ同じ場

合、また、【新釈】と【新注釈】の説明がほぼ同じ場合、【講

義】や【新釈】をあけて、【全講】や【^訂蜻蛉日記】また【新

注釈】を「同じ」と書いたり省略した場合がある。

八、【大系】の語釈中、『倭名類聚抄』や『類聚名義抄』などを

引用する場合、漢字の下に、よみがなが書いてあるが、本書

では大体、漢字の傍記に改めたことをおことわりしておく。

ただし第二巻目以降ではなるべく本文どおりにした。

【例】 函フミハコ → 函^{フミハコ}（倭名）

咳^{シハフキ}嗽^{シハフキ} → 咳^{シハフキ}嗽^{シハフキ}（字類）

九、語釈の時、見出し以外の訳がはいる場合、その部分を（）

に入れておいた。

【例】 まめ文 【全集】表向きの文通（をくりかえして）。

十、【補遺】【紀行解】の語釈は第五巻にも全部入れた。ただし

【補遺】の語尾は簡潔にした場合もある。また適宜に句読点

を施した。

十一、直接関係のない例などは省略した場合もある。

十二、和歌の通釈は【全訳王朝】や【物語日本文学】のにも入れ

たが、語釈は必要に応じて採択した。ただし、長歌は省略し

た。

十三、◇を付して諸氏の見解をあげた場合もある。

十四、私の見解は【注解】とは同じであるが、相違する場合

は◆を付してあげたり、また通釈でも示した。

十五、【語釈】に掲げた諸本は左のものである。頭部に略称を

あげた。ちなみに版を重ねたものは成るべく新しい版のもの

を用いるよう心がけた。

【解環】 坂徴『蜻蛉日記解環』折口信夫編輯『国文学

註釈叢書』六 名著刊行会

【補遺】

田中大秀『かけろふの日記解環補遺』（仮称）

吉沢義則編『未刊国文古註釈大系』第十三卷

清文堂

【紀行解】 田中大秀『蜻蛉日記紀行解』右と同じ。

【全訳王朝】 吉沢義則博士『^全王朝文学叢書』第十一卷

所収の『かげろふの日記』 王朝文学叢書刊

行会

【物語日本文学】 『物語日本文学』第八卷所収の『蜻蛉

日記』上・下 至文堂

【現代訳】 雅川湜氏『蜻蛉日記』（現代訳日本古典所収）

小学館

【講義】 喜多義勇氏『蜻蛉日記講義』 至文堂

【現代平安朝女流日記】 与謝野晶子『蜻蛉日記』（飛龍文

庫4『現代平安朝女流日記』所収） 非凡閣

【学燈文庫】 関根慶子博士『紫式部日記・蜻蛉日記』

（学燈文庫）（抜粋である） 学燈社

【大系】 川口久雄博士校注『かげろふ日記』（日本古典

文学大系所収） 昭和六十年十月十五日第二八版

岩波書店

【川口氏】 「かげろふ日記評釈」（国文学 解釈と教材の研究

究）昭和36年2月号より36年6月号まで） 学燈社

【探究】 村瀬英一氏『蜻蛉日記の探究』（抜粋である）

有朋堂

【新釈】 次田潤博士・大西善明氏『かげろふの日記新

【全講】 喜多義勇氏『全講蜻蛉日記』 至文堂

【萩谷氏】 「関の山路あはれあはれとおぼえてー蜻蛉日記

本文に対する対照法解釈の適用ー」（『国文学 解

釈と教材の研究』昭和38年2月号） 学燈社

【注解】 秋山虔氏・木村正中氏・上村悦子『蜻蛉日記

注解』（『国文学解釈と鑑賞』昭和37年5月号より

46年3月号まで） 至文堂

【全注釈】 柿本奨氏『蜻蛉日記全注釈』上巻・下巻 昭

和四十九年九月三十日第五版 角川書店

【抄】 三宅清氏『かげろふ日記抄』（抜粋である）

著者蔵版

【訂蜻蛉日記】 喜多義勇氏校注『訂蜻蛉日記』（日本古典

全書所収） 朝日新聞社

【新注釈】 大西善明氏『蜻蛉日記新注釈』 明治書院

【全集】 木村正中氏・伊牟田経久氏校注・訳『蜻蛉日

記』（日本古典文学全集所収） 昭和四十八年三月

三十日第一版 小学館

【全評解】 村井順博士『かげろふ日記全評解』上・下

有精堂

【対訳】 増田繁夫氏訳・注『かげろふ日記』（対訳日本

古典新書所収） 創英社

【集成】 犬養廉氏校注『蜻蛉日記』（新潮日本古典集成

所収 新潮社

その他、^{五十嵐鶴好著}『蜻蛉日記解環旅寝』名古屋国文学会、^{松田好夫校}山岸徳平博士の『日記文学』（国文学習叢書）、また原田芳起博士の『平安文学研究』所載の「蜻蛉日記私注」の諸論文をはじめ諸先輩・畏友の数多くの論文に記載されたご見解をあげさせて頂いた。

十六、「蜻蛉日記注解」は以前九十九回にわたって『国文学解釈と鑑賞』に畏友秋山虔氏と木村正中氏と共同執筆させて頂いたので、私の見解の中心をなす上、底本はじめ主要伝本の校異も丹念に紹介してあるので、ほとんど全部あげた。次に伝本名並びに略号をあげておきたい。

底—底本・宮内庁書陵部本

阿—阿波国文庫旧蔵本

松—島原松平文庫本

上—国会図書館上野支部本

彰—彰考館本

急—大東急記念文庫本

無—無窮会神習文庫本

（第一類B系本—阿・松・上・彰・急・無）

吉—吉田幸一博士蔵本

（第一類本—底より吉まで八本）

萩—東京大学蔵萩野本甲本

見—松下見林旧蔵本

教—東京教育大学本

京—京都大学本

（第二類本—萩より京まで四本）

岡—岡倉氏旧蔵本

学—学習院本

沢—京都女子大学蔵吉沢氏旧蔵本

東—東京大学蔵南葵文庫本

小—東京大学蔵萩野本乙本（小諸文庫旧蔵本）

静—静嘉堂文庫本（青木信實本）

永—日本大学蔵永森氏旧蔵本

（第三類本—岡より永まで七本）

版—元禄十年版本

他は前掲と同じ。

【解環】は国文学註釈叢書（六）により、曖昧な字は架蔵版本の「蜻蛉日記解環」に六冊と「かけろふ乃日記解環」凡例一に拠った。

【補遺】【紀行解】は未刊国文古註釈大系（第十三巻）による（念のため飛騨高山の香木園在那文庫で木村正中氏と一緒に全部写真に収めたのを参照）。

三 通釈

四 鑑賞・解説

一、三、四とも拙著『蜻蛉日記全訳注』（上・中・下）講談社、

昭和六十二年第六刷のものを基にして修正を加えつつ私見を述べた。

五 補注

- 一、本文読解に役立つような事項をとりあげて委しく解明した。
- 二、また「語釈」の項に入れられなかった方々のご見解もあげた。さらに『形成』に掲載されている篠塚純子氏のご論文は、じめ蜻蛉日記の内容を理解するのに有効なご論文もあげさせて頂いた。

もくじ

天禄二年

九十	兼家の前渡り	一
九十一	石木の如く明かす	三
九十二	さ筵の塵	四
九十三	呉竹を植ゑる	六
九十四	思はぬ山に	七
九十五	父の家	八
九十六	長精進を始む	一〇
九十七	夢二つ	一二
九十八	菖蒲ふくころ	一三
九十九	里住みの悔み	一四
百	世に侍る身のおこたり	一五
百一	問はず語り	一六
百二	鳴滝参籠 (一) 山寺に到着	一九
百三	鳴滝参籠 (二) 兼家迎へに来山	二三

百四	鳴滝参籠 (三) 山寺からの文	二六五
百五	鳴滝参籠 (四) 物思ひの住み処	二八二
百六	鳴滝参籠 (五) 道綱と語る	三三三
百七	鳴滝参籠 (六) 妹の訪れ	三四八
百八	鳴滝参籠 (七) 兼家の使者来訪下山を勧む	三七二
百九	鳴滝参籠 (八) 京へ出かけた道綱	四三三
百十	鳴滝参籠 (九) 人々からのお見舞だより	四三七
百十一	鳴滝参籠 (十) 兼家と交信	四六一
百十二	鳴滝参籠 (十一) 親族の訪れ	四七六
百十三	鳴滝参籠 (十二) 登子よりの文など	五〇二
百十四	鳴滝参籠 (十三) 道隆の来訪	五二六
百十五	鳴滝参籠 (十四) 父の来訪	五五七
百十六	鳴滝参籠 (十五) 鳴滝へ兼家の再度の迎へ	五五九
百十七	帰宅の夜	五九三
百十八	下山後の生活	六二七
百十九	その後の兼家	六七五
百二十	再度の初瀬詣で (一)	六九一
百二十一	再度の初瀬詣で (二)	七五〇
百二十二	あしたのかごとがち	七九七

百二十三	問はぬはつらきもの	八二六
百二十四	晩秋のころ	八三三
百二十五	霜の朝	八四六
百二十六	あまがへるの異名	八五五
百二十七	師走つごもりの日	八八八
あとがき		八九九

九十 兼家の前渡り

さて、年頃思へば、などにかあらむ、ついたちの日は見えずしてやむ世なかりき。さもやと思ふ心づかひせらる。未の時ばかりに、先おひのゝしる。「そそ」など人もさわぐ程に、ふと引き過ぎぬ。急ぐにこそはと思ひかへしつれど、夜もさてやみぬ。つとめて、こゝに縫ふ物どもとりがてら「昨日の前渡りは、日の暮にし」などあり。いと返り事せまうけれど、「なほ、年の始めに、腹立ちな初めそ」など言へば、少しはくねりて書きつ。かくしもやすからず覚えいふやうは「このおしはかりし近江になむ文通ふ。さなりたるべし」と世にも言ひさわぐ心づきなさになりけり。さて二三日も過しつ。

四日、また、申の時に、一日よりもけにのゝしりて来るを、「おはします／＼」といひつゞくるを、一日のやうにもこそあれ、かたはらいたしと思ひつゝ、さすがに胸走りするを、近くなれば、こゝなるをのこども、中門おし開きて、ひざまづきてをるに、むべもなく引き過ぎぬ。今日まして思ふ心おしはからなむ。

またの日は大饗とてのゝしる。いと近ければ、今宵さりとともと心みむと、人知れず思ふ。車のお
とごとと胸つぶる。夜よき程にて、皆帰るおとも聞ゆ。門のもとよりもあまたおひ散らしつゝ行く
を過ぎぬと聞きたびごとに心はうごく。限りと聞きはてつれば、すべてものぞ覚えぬ。
あくる日、まだつとめて、なほもあらで、文見ゆ。返り事せず。

本文整理

急ぐにこそいそなたこそ　かくかへ　心づきなさー心□なさ　四日ー三日　思ふ心ー思こゝろ　おしはからな
むーおしはからん　うごくーうとく　あくる日ーある日

語釈

○さて、年頃思へば【補遺】元日公女君の前わたりて立寄
たまはさりし事。【講義】「朔の日は云々」に續けて、これま
で毎年の例を考へるとなる。【大系】天禄二年（九七一）兼
家四十三歳・作者三十五歳頃・道綱十七歳。「年ごろ」例年。
【新釈】大系と同じ。作者三十六歳頃。【全講】「ついたちの
日は」以下にかかる。【新注釈】新釈と同じ。【集成】今まで
の事を考えてみると。

○などにかあらむ【解環】何故乎といはんごとし。【講義】

挿入句で、今年はまだ来ないといふやうに補つて解する。
【大系】挿入句。例年、一日の日は見えないでしまうとい
うことがなかった。今年にかぎって訪れがないのは、どうした
ことだろう。【全講】挿入句であるが、甚だ舌足らずの言葉
である。年頃の例を思い返して見ると、元日には必ず訪れて
くれたのだが、今日はまだ顔を見せないがどうしたことだ
ろう、というのである。【全注釈】どういうつもりなのか知
らないが。はさみこみ。元日にはきまつて来る理由について

言うのであって、『全講』は、元旦の今日、まだ来ないのはどうしてだろうか、と解するが、それでは文脈の屈折が大きくなりすぎるからいがある。用例は一八四段『本書百六十七段』一八行に見える。【注解】挿入句である。それは、毎年元旦にはかならず訪ねてきた兼家が、今年にかぎって、作者の邸前を供廻りいかめしく通りながら、立ち寄りもせずについてしまったことを、どうしたわけかといふかるのであって、「年頃思へば——ついたちの日は見えすいてやむ世なかりき。……『そそ』など人もさわぐ程に、ふと引き過ぎぬ」まで全体に影響する。元旦の習慣をはじめ破った彼に対する不満と心外な仕打ちとが、本日記の執筆時にまざまざと甦ってきて、思わず「などにかあらん」という疑問を先述してしまつたため、通常の文章の書き方をなしていない。そして彼女の希望と落胆が混線して表現されており、ここにも過去と現在との渦巻く心理が読み取れよう（木村上掲論文参照）。【訂蜻蛉日記】今年はどうしたのだらうか。【全集】挿入句。いまになってみれば、兼家がよく来てくれたものだと思議なくらいに思われるが、の意。十二月の述懐とつながりをもつた作者の感情。「……ふと引き過ぎぬ」（八行）まで全体に係して、どうして今年は元旦に来てくれないのかも取れるが、文脈上不自然すぎる。【全評解】どうしてであらうか。このことばの被修飾語は、「なかりき」。【集成】年来、元旦には必ず訪れたことに対する疑問。

○ついでたちの日 【解環】即、元日なり。【全注釈】元日。

【訂蜻蛉日記】元日。【全評解】ここでは正月一日の日の意。

○やむ世なかりき 【解環】原本には「やむまなかりき」とあり。さきだちて臆に「時のとの脱せしや」と「ときなかりき」と、釈せし後、契本を見れば、まをよの誤として「夜なかりき」とせし。余はまた、世としぬ。【補遺】本ニまトアルハことヲ誤レルニモアルヘシ。毎年元日ニ来給ハテ止シ事ハナシトナリ（朱）。解環註ニ「原本ニハ、やむまなかりきトアリ」トアルマ文字ノ傍ニよ（朱）ト書ク。【大系】前項に含む。【集成】（元旦の日に）見えすじまいの時はなかった。

○さもやと思ふ心づかひせらる 【講義】「さもや」は下に「あらん」を補つて、さうもあらうか、即ちそのうち来るであらうか。【大系】でもそのうち訪れることであらうと心待ちに用意して待つ気になっている。【新釈】これまでには元日には必ず兼家の来訪があつたので、今年も訪れない事はなからうと期待させられるのである。【全講】「さもや」は、さうでもあらうか、即ちやがては訪れてくるだろうと心待ちにしている。【全注釈】「心づかひせらる」自然と兼家を迎える心使いをする気になる。【新注釈】新釈と同じ。【全評解】さうであらう。「さもやあらん」の略。「さ」は、「ついでたちの日は、見えすいて、やむ世なかりき」をさす。【集成】もしかしたら、今日（元日）は来てくれるかも知れないと、自然、兼家を迎える心づもりになって来る。

○未の時ばかり 【講義】午後二時頃をいふ。【新釈】午後二

時から四時まで。【全講】講義と同じ。【全注釈】午後一時頃から三時頃までの間。【訂蜻蛉日記】講義と同じ。【新注釈】午後一時から三時まで。【全集】午後二時またその前後二時間。一説には二時以後二時間。【全詳解】新注釈と同じ。【対訳】同上。【集成】講義と同じ。

○先おひのゝしる 【講義】「さき」は前駆で、行列の先を制

して通路を設けて行くことをいふ。兼家が堂々と行列を整へて来るのである。【大系】先払いが騒ぎののしって警蹕^{けいぱく}の声をあげてくる。「一日さきをひてわたる車の侍りしを」(源氏夕顔。「けいひつなどおしおしといふ声聞ゆ」(枕)。【全講】「先」は先駆。貴人の行列の先頭に立って通路を整理して行くことをいう。【訂蜻蛉日記】前駆。【対訳】兼家の車の前駆の侍たちの前を払う声。【集成】賑やかな先払いの音がする。

○そそなど 【解環】本文「そよなんど」。【講義】「そゝ」はも

と指示代名詞「そ」を重ねたもので、「さあ」と人をせき立てる語。【大系】「驚破」(文集、長恨歌。【新釈】それよ、それよ。【全講】それそれで、人の注意を促す語。【全注釈】「それそれ」と、兼家の来訪を指示するという語。兼家を迎えるしたくを急がねばならぬと自他にいう意を籠めていよう。【抄】水戸本契沖注^{ツナ}「驚破」長恨歌それその心歎。【訂蜻蛉日記】それそれとせき立てる語。【新注釈】新釈と同じ。【全詳解】それそれ。感動詞。【集成】兼家を迎える用意をそその

かす語。

○人も 【全注釈】侍女も。「も」に作者はもとより、の意を籠める。【集成】侍女も。

○ふと引き過ぎぬ 【解環】原本ふとの下にきのかな有れども、是亦契本にしたがつて衍とす。急がるゝ故、今は車を引すぎたれども、夜は、帰りに、我方へ来らるならんと思ひてまでも、つひに其夜もみえざりきとなり。【講義】素知らぬふりで、すつと門前を通りすぎてしまったのである。【全講】兼家の行列が門前を素通りしてしまった。【集成】さつと通り過ぎてしまった。

○急ぐにこそは 【解環】本文「いそぎにこそは」。【講義】本文同上。【新釈】本文同上。【全講】底本「いそなた」は誤。「あらめ」を補う。作者が善意に解して、立ち寄るひまがないのであらうよと思ひ直して見るのである。【全注釈】「急ぐにこそはあらめ」などの言いさし。兼家は新年の拝賀に回っていたのであらうか。この時は未の刻だから、やがて小朝^{こあさ}拝に参内し、引き続き日没後の節会に加わらねばならない(御堂関白記)など参照。作者はもとよりそれを承知していて、参内の時刻が迫るのに、それまでにすまさればならぬ用事があって、急いでいるのであらう、のつもりでいっている。底本は(前掲)に作る。同文に作る彰考館本に対しその書入れは「いそぎにこそは」と改める案を示しているが、その誤写例もあり、書体相似の可能性も十分認められて、それもま

た良案と考えられる。【注解】「いそなたこそは」(静・永以外の諸本)「いそぎにこそは」(静・永)。静嘉堂本・永森本に本文化された「いそぎにこそは」の改訂説は、書入にもしばしば見られ、解環・講義以下の通説となっていたが、大系がそれを捨て、渡明校本等の「いそぐにこそは」を採用したのは適切である(全講・索引同じ)。「いそぐ」と転化したもの【抄】本文「いそぎにこそは」。【訂蜻蛉日記】急いでゐるのであらうと。【全評解】本文「いそぎ」。急用。名詞。「いそぎにこそはあらめ」の略。【対訳】先を急ぐので寄らないのだらう。【集成】急用でもあるのかと。

○思ひかへしつれど 【全注釈】落胆する気持を取り直し、よいほうへ考えを向けることをいう。【訂蜻蛉日記】思ひ返したが、夜になつても。【集成】元日の夕刻は小朝拝(天皇への参賀)があり、引き続き節会が行われる。小朝拝に参内するまでに済まされねばならぬ急用でもあらうかと、一応、善意に解釈したもの。例年の来訪は、節会が果ててからのことであらう。

○夜もさてやみぬ 【講義】「さて」さうして、そのまゝ。「やみぬ」はすんでしまつた、即ち立寄らなかつた。【全注釈】「さて」訪れぬまま。兼家は節会の帰途にも作者を訪れなかつたのである。【訂蜻蛉日記】夜になつてもそのままですんでしまつた。【集成】それっきりだった。

○つとめて 【解環】その明早なり。此日記往々あり。【全講】

翌朝。【全注釈】翌正月二日の朝。【集成】翌朝。

○こゝに縫ふ物どもとりがてら 【講義】「縫ふもの」仕立物。「取りがてら」受取りに来る序でに。【全講】「ぬふもの」同上。【集成】こちらに縫物を取りに使いを寄越しついでに。

○昨日の前渡りは、日の暮にし 【解環】本文「きのふのまへわたりは、日のくれにしかば」。【講義】兼家の手紙の文句「前渡り」は前を通り過ぎること、「日の暮れにし」は連体形を用ゐて終止してゐるのである。【大系】本文「昨日のまへわたりは、日のくれにしかば」。【新釈】本文同上。門前の素通り。【全講】「し」(連体形)で止めたのはいいさした形。帰りに門前を通つた時は、もう日が暮れていたので寄らなかつたのだ。解環は「日のくれにしかば」と「かば」を補う。【全注釈】昨日作者邸の前を通つたのは、所用を終えると日が暮れてしまつたので、ただちに参内し、訪れることができなかった、の意。兼家の手紙か、使の口上か、明らかでない。【注解】「日の暮れにし」諸本同じ。「日のくれにしかば」(学習院本・三手文庫本などの書入、解環・大系・新釈。索引も本文は「日の暮れにし」だが、これに従うべきか、あるいは「くれしに」とすべきかと疑う)と、「かば」を補う必要はあるまい。余韻を残した言いさしの連体止めと見る(講義・全講)。【抄】作者の家の前を男

が渡る（通行する）事。【新注釈】新釈と同じ。【全評解】本文大系と同じ。【対訳】恋人や妻の家の前を通りながら、立ち寄らずに行ってしまうこと。女の側からすると大変腹立たしい。また心を痛めることであった。【集成】所用を済ませてからと思っていたが、日が暮れてしまったので（そのまま参内した）。

○いと返り事せまうけれど 【講義】「ま」は「まほし」の「ま」と同類で、所謂推量の助動詞「む」の変化した形とする説がある。「せむこと」と体言の性質を帯びることが注意される。【全講】「まうし」はまほしの反対で、返事を書くのはいやだけれども。【全注釈】兼家に誠意が認められない、節会の帰りにだつて寄れるではないか、と作者は思ったゆえであろう。【全評解】するのがいやだったが。【集成】返事をする気にはとてもなれなかったが。

○なほ 【全注釈】以下の詞は、年配の侍女の忠告であろう。【集成】（侍女）やはり。

○腹立ちな初めそなど言へば 【解環】「腹立しそめな」とは、家人などの云るならん。【大系】年ごろの人、侍女たちこれかれが。【全注釈】「腹立つ」で一語。これは事忌みである。六八段＝本書五十八段参照。【全評解】「な初めそ」の意。初めなざるな。「な」は副詞。【集成】御立腹は禁物です。

○少しはくねりて書きつ 【解環】古今の序に「をみなへし

の一時をくねるにも云々」又、「くねくねしき」と云詞も、源氏に所々に見ゆ。畢竟、おだしからず一ふしあるの詞ときこゆ。【講義】「くねる」は「曲る」意で、手紙の内容に、ひねくれた機嫌の悪さうな風を見せて書いたのである。【大系】すねたように女の切ないうらみをこめて書いた。「をみなへし」のひとときをくねるにも」（古今序）。「ききにくくじちならぬことをもくねりいひ」（源氏、東屋）。【新釈】ひねくれて、すねて。【全講】素直でなく、ひねくれて、すねた文句を書いた。【全注釈】すねた文句で。【抄】怨みごとをまぜて、すく

よかならぬ書き方をしてやったのである。古今集序に「男山の昔を思ひ出で、女郎花の一時をくねるにも、歌をいひてぞなぐさめける。」とある。日記天延二年四月の記事に馬の頭が養女を所望してしきりに近附こうと迫ったが作者が応じなかったので、「さらば今は仰言なからむには聞こえさせじ」と言つて帰った事を記してさて「さくねりても又の日」馬の頭が助を誘ひに来たとある。「くねる」は一寸すねる意味もある。【新蜻蛉日記】ひねくれて書いた。【新注釈】新釈と同じ。【全評解】ひねくれ恨んで。【集成】多少いや味まじりに。

○かくしもやすからず覚えいふやうは 【解環】本文「かくしも、やすからずおぼえて、いふやうは」。【補遺】「おほえていふやうは」本ニおほへゆうやうはトアリ。へハ衍ニテゆうハゆるノ誤ナルヘシ。直シ不可也改（朱）。えていふノ四字ヲ朱ニテ消シテ、傍ニ「ユル」ト書ク。【講義】「安から